

7 国際交流

進捗状況報告

○基礎的な状況を継続的に観測する指標				公開/非公開	全学的な視点	個別的な視点	単位	2004	2005	2006	2007	2008	備考	
指標1	国際交流協定締結機関数			公開	○	機関								
指標2	国際交流協定締結国数			公開	○	国								
指標3	海外からの学生の受け入れ	国 数		公開	○	国								
		外国人留学生	正規	公開	○	○	人	64	73	81	82			
			交換	公開	○	○	人	2	3	5	3			
		外国人留学生 在籍学生比率	正規	公開	○	○	%	2.3	2.6	2.8	2.8			外国人留学生÷在籍学生数
			交換	公開	○	○	%	0.1	0.1	0.2	0.1			
その他 (セミナー等による受け入れ)			公開	○	人									
指標4	海外への学生の派遣	国 数		公開	○	国								
		人 数	長期	公開	○	○	人	10	10	9	14			
			短期	公開	○	○	人	40	20	23	33			
		在籍学生比率	長期	公開	○	○	%	0.4	0.3	0.3	0.5			海外へ派遣した学生数÷在籍学生数
			短期	公開	○	○	%	1.4	0.7	0.8	1.1			
指標5	人的国際学術研究交流 (受け入れ教員数)			長期	公開	○	○	人	0	0	0	2		
				短期	公開	○	○	人	4	7	7	2		
指標6	人的国際学術研究交流 (派遣教員数)			長期	公開	○	○	人	2	0	1	1		
				短期	公開	○	○	人	10	10	13	7		
○施策の目標の達成度を測る指標				公開/非公開	全学的な視点	個別的な視点	単位	2004	2005	2006	2007	2008	備考	
指標7	国連ボランティア(UNV)の参加者数			公開	○	人								

注) 全学的な視点、個別的な視点について
 全学的な視点とは国際教育協力センターの進捗状況報告シートに表示される項目
 個別的な視点とは各学部の進捗状況報告シートに表示される項目
 注) 正規、交換について
 正規とは学位取得目的、交換は正規以外とする。
 注) 長期、短期について
 指標4: 1学期以上を「長期」とし、1学期未満を「短期」とする。
 指標5・6: 1年間以上を「長期」とし、1年間未満を「短期」とする。
 注) 指標4は学部、研究科を合わせた数とする。

(1) 2003年度に設定した目標

- 留学生入試については質の高い学生を確保するために入試に英語を導入すべきか否かを含めて、検討課題となっている。留学生の全学年在籍学生数は2005年度73名、06年度81名、07年度82名、08年度73名となっている。
- 教員の国際交流はリール第1大学との交流が引き続き行われており、さらに韓国・延世大学、シンガポール・シンガポール国立大学との教員とゼミ生同士の研究交流が行われている。
- 学部生への外国語教育の改革が行われるとともに、日本人学生の協定校留学も2005年度3名、06年度5名、07年度6名、08年度5名(予定)と年により変動が大きいが、以前よりも漸増してきている。
- 関西経済界との共同事業については次項の4.を参照されたい。

(2) 2005年度自己点検・評価で記した「改善の具体的方策」

- 前項(1)の1.に記したように現在では各ゼミに平均1名弱の留学生がいるほどになっている。ただし、出身国は9割以上が中国で、その多様化に向けてまだまだ改善の余地が残されている。
- リール第1大学との研究者交流は引き続き行われており、2008年度はEUIJ関西の活動の一環としてリール第1大学から研究者を関西学院大学経済学部へ迎える予定である。
- 学部レベルでの英語の授業は、2008年度のアメリカ・ローレンス大からの招聘研究員が経済学トピックス(資源経済学)で試行的に行われた。
- 地元経済界との協力を得た国際的連携としては本学産業研究所の主催した企業向けのイノベーション・フォーラムを2007年秋に開催し、本学部の教員2名がこの活動に直接参加した。

学内第三者評価

設定された目標もそれを実現するための改善施策も、おおむね順調に進展している。なかでも、試行とはいえ、これまで課題とされてきた英語による授業が実施されたことは評価できる。
 留学生入試については、質の高い多様な学生を受け入れることを目標としているが、入試に英語を導入することにより目標が達成できるかどうか、中国人留学生が9割以上である現状を踏まえ、十分に検討され、目標が達成されることが期待される。

なお、学外委員からは以下の意見があった。
 学部として国際化推進に関心が払われていると感じられる。留学生数は徐々に増えてきているし、比率もよい。各ゼミに平均1人弱という状況はよい。さらに入試に英語を導入する点につき早急に検討を進められたい。
 長期の教員受け入れが実現したことは評価できる。しかしながら、短期の受け入れ人数が減少し、教員の海外派遣も長・短あわせて8人と減少している。多くの制約があろうが、人的国際学術研究交流において受け入れ、派遣とも増加することが期待される。
 学部レベルの英語による授業が試行された意義が大きいため、更に機会をつくって実施することが期待される。